



心の臨床を哲学する
—Philosophy of Psychiatry
& Psychology—

榎原 英輔, 田所 重紀,
東畑 開人, 鈴木 貴之 編著
新曜社
2020年5月 288頁
本体価格 3,500円+税

2020年は新型コロナウイルス感染症によってすべての人々の生活が大きな影響を受けた年であった。世界や人生の根本原理を追求する学問である哲学においてはその時代に沿った世界観のようなものに関係しているが、まさに今が近代から現代に至る文脈がこの感染症によって新たな時代へ大きく変化する狭間にあるように思える。パラダイムシフト (paradigm shift) という言葉は、(本書のまえがきにある) 科学哲学者のトーマス・クーンが提唱したパラダイム概念から派生されたものであるが、今の時代の AI/IoT 革命と新型コロナウイルス感染症が相まってポストコロナ時代に向けて大きな変化が起こらざるを得ない状況になっていると感じる。そして社会に深く関与する精神医学の分野でも同様に対応が必要となっている。

さて一般の学問における哲学の立ち位置と、医学における精神医学とが類似しているとの議論がある。さらに精神医学と心理学ではその異同が語られることの多い近接した学問領域である。精神医学と心理学と哲学の分野で個々に取り組んできた知を集めて、難解なところの問題に向き合うことは大切な視点である。本書は14編の論文で構成され、哲学・精神医学・心理学の各分野の専門家による概念的・根本的な視点から実践的・応用的な課題が論じられている。本書評においては心の臨床への実践面について評者の印象に残った点を記載したい。

本書では心の哲学の基本的な視点として、理論説とシミュレーション説という2つの見解が紹介されている。理論説は心の理解のために一般的な法則を個別事例に適用し、シミュレーション説は「その人の立場に身を置き」、その人の立場で考えるという説である。ここで了解や共感とはシミュレーションを通じて働き、心的シミュレーションの

方法を (x) 自動的か意図的か、(y) 他者と自己とが同様の状態になるか否か、の二軸によって整理すると見通しがよくなる (p.58) とされている。自閉スペクトラム障害 (ASD) に関する章において、著者は ASD における「発達への偏り」は価値中立的であるが、発達への偏りを抱えた当事者がどのように医療を必要とし、その言動がどの程度に逸脱的であるかという判断において、医師を含めた支援者の価値観や倫理観が色濃く反映されると述べている。その上で、「評価自体に含まれる支援者の価値観や倫理観を正しく自覚したうえで、可能な限り当事者の視点に立とうとする努力が必要になるのである」(p.79)。

心の臨床ではこころの理解において「当事者」の立場に立つことが重要であるが、さらには支援を行う側の価値観 (哲学的視点) というものへの自覚が必要である。その点は本書の後半で述べられている薬物依存症への治療で具体的に記載されている。依存症臨床では医療者と当事者の関係の変化が大切であり、医療者は薬物を使用した本人を感情的に非難するのではなく、回復への期待を持ち続けられる関係を構築することが必要である。その両者の関係は「規範と実際の意図・期待の相互作用を経て少しずつ変化し続けるものとなる」(p.240)。この視座は医療者と当事者の相互作用によって左右される面の強い心の病の治療過程において、両者の関係修復が治療的改善につながる可能性を示唆すると思われる。

はしがきに「基礎の掘り下げと実践の俯瞰というのは、哲学という営みの二つの基本的な方向性である。心の臨床を哲学するということは、日常の臨床を対象としながらも、それぞれ日常とは異なる水準から捉え直し再考するという作業である」とある。臨床という言葉はクリニック (clinic) の語源でもあるベッド (病床) に臨む治療・診療を指しているが、臨床哲学という分野もあり、生活や社会の場における問題に問いかけ定式化する哲学を指しており、日常への問いかけを行っている。大きく価値観や世界観が変わろうとする現在、日々の臨床の課題について異なった視点も取り入れつつ、日常診療のありかたを問い続けることが大切なかもしれない。

(谷井久志)